

なり。よつてくだんのごとし。成程。名前は下駄屋喜六さま。オイ様づけやな。何處の妓や。備前屋店、小照事、本名たね。本名つきやな。備前屋の抱妓で小照と云ふのか。本名たね。備前屋の抱妓で本名たね……たね……オイ喜いやん。」

「えゝ。」

「此の備前屋と云ふたら難波新地か。」

「そや。」

「此の小照と云ふたら年の頃二十二三の。」

「そや。」

「元、堺の新地に出た。」

「そや。」

「去年の暮に大阪へ仕替へ取つて来た。」

「そや。」

「丸顔の。」

「そや。」

「笑ふとゑくぼのは入る。」

「そや。」

「鼻の横にほくろのある。」

「そや。両方に耳の有る。」

「當り前や。フ、ン……あの小照か。シヨムない。」

「オイ源やん。無茶しいないな。ほつたりして。お前はシヨムナイか知らんけど、俺いは神棚へ揚げて洗い米こめを供へて朝晩拜んでるのやで。此の先きをチヨツと千切つて水で飲んだら、何んな病ひでも癒るといふ位や。もし火鉢の中へでもはまつたら如何するね。プツくくくく。」

「フン、頼頼に力を入れて怒つてくさる。そんな物なら俺い等煙草入の中へ投り込んだア。サア是れ見てみイ。」

「エー、これや、一、天罰起請文の事。ア、源やん、これ起請やな。」

「そうや。」

「ひとに起請を貰ふのは弘法大師が髻が有つて手習屋へ行てる時分やと云ふて居て、自分かてこんな物を貰ふて居るがな。ナニ私し年明き候得ば貴所様と夫婦の約束致候處實證也。爲後日依如件。」

「たいてい、文句は極まつてる。」